自閉症児Aさんの場合

大蔵　みどり

私は知的障害養護学校の小学部で教師をしている。「甘い」というテーマをいただいてまず思い浮かんだのは、私が以前担任していたAさんのことである。

当時六年生だったAさんはよく私におんぶされたり抱っこされたり、布団にもぐって抱き合うこともあった。また、活動の途中で退室しようとすることに対しても、他の児童に比べて例外的に許容していた。そして悪いことをしても教師が怒声を上げることは殆んどなかった。一方でAさんは体格は大人並み。運動能力も良く、手先も器用。言葉が話せ、読み書きもでき、本校では知的に高い方のお子さんであった。恐らくはそのギャップのせいもあるだろう。事情をあまり詳しくは知らない教師から「甘いんじゃないの？」と言われることがあった。ましてや他の保護者は皆そう思っ

ていただろうと思う。その上、Aさんを元、担任したこともあり、時々臨時で付いてもらうことのあったB教諭からも「六年生だし、もう少しちゃんとさせた方がいいんじゃないかな。ぼくとだともっとちゃんとやるよ」と言われてしまい、八〇パーセントくらいは自分はこれで良いと思いつつも、悩む部分もあり、私はたびたび参考書（後注）を読み返しては、考えていた。

Aさんは自閉症であり、かつ行動障害のあるお子さんであった。自傷、他傷、破壊などの困った行動が顕著であったが、その克服に努力してきた結果、ずいぶん良くなった。主たる直接的な原因は注目要求だった。教師に「コラーッ！」と言って追いかけられ、ギュッと「つかまえた」をしてもらいたいがために、悪いことを次々覚えてしまったのである。まずその原因を把んだ私たちは、そういうきっかけには応じないこと、代わりに「まてまてつかまえた」遊びをたくさんやってあげ、「まてまてする」と本人が言葉で要求すればいつでも応じてあげることを理解させた。その後、言葉で要求する力が伸び、多少嫌なことでもがんばったら物心共にごほうびが与えられるよということも理解して、最も苦手だった式、行事への参加も可能になってきた。

そんなすばらしい成長を遂げてきたAさんではあったが、依然として「私だけを見ていて！」というアピールが強く、見つめた目をそらさないこと、スキンシップや言語反復による頻繁な愛情確認、ギュッと強く抱きしめることを求めてきた。そして、時々怒って怖いB教諭の前ではおりこうにしているが、五年間に亘って毎日つきあってきた唯一の同性教師である私にはすごく甘えてくるし、あまりがんばってもくれなかった。そこをもう少しがんばってよ、と要求しすぎると、困った行動をチラッチラッと出してきた。さらには六年生になってから、家庭内で暴れ、家具を壊したり

母親に暴力を振るったりする問題が生じてきた。これはもしかしたら、「ついに六年生」ということで学校でも家庭でも、Aさんに対し急に要求が高くなった(例えばそれまでは朝の会はプログラム二番まで着席すれば、後はリラックスコーナーに行ってもよいことにしていたのを、終わりの挨拶まで着席させようとした)ことが原因だったかもしれない。

私がAさんに対し、「甘い」と思われる対応をしていたのにはそういった背景があるのである。強い自閉性を持つ子どもを社会適応させようとして厳しい指導をしすぎると、さまざまな行動障害を生じやすい。一度獲得してしまった問題行動、

とりわけ他傷は自閉症からくる一次的な不適応よりも一層深刻であり克服も困難である。

Aさんが何故そんなに抱きしめてもらいたかったのか、それははっきりとはわからないが、Aさんには時々、「嫌悪記憶のフラッシュバック」(詳しくは後注の参考文献等を参照されたい)というようなことがあった。例えばある日も、私が椅子を移動しようとしてAさんの目の前で高く持ち上げると、突然恐怖の表情とともに防衛姿勢を取った。またAさんは大人の怒声や他児の泣き声でも不安定になり、ストレスの度合いによってはパニックになることもあった。一般的に、自傷、他傷、破壊といった行動障害の背景には、暴力を受けたり、観察したり、あるいはすっかりまかり通る状況があったかが考えられるという(後注書より)。恐らくAさんの生育史の中にもそんな辛い体験があったのだろう。

あるいは理由は他にあるのかもしれない。いず

れにせよAさんは、私に強く抱きしめてもらいたがったことはまちがいない。不安定やパニックに陥った時には、「大丈夫だよ」と優しく言って背中をギュッと抱きしめてあげることが有効であったこともまちがいない。それならば理由の真相なんて、どうでもいいじゃないか。Aさんは求めていたんだ。ましてやAさんは自閉症。対人関係の障害である。

どこまでがんばらせるのか、についても、立派な中学部生になるには一体何をどこまでがんばらないといけないというのだろうか。早い話が、集団行動が取れる、おとなしく座っていられることが求められているわけだが、それが難しいのが自閉症であり、難しいからこそ養護学校に来ているわけである。一歩でも二歩でも、いわゆる健全者に近づけようという発想は私には全くない。とにかく自閉症児にとって生きにくいこの社会と、なんとか折り合いを付けて、心安らかな一生を送ってほしいと願う。そのために一体、本当は何をどこまでがんばらせる必要があったのだろうか。

保護者からは、とかく「優しい」教師よりも「厳しい」教師の方が支持されやすい。しかし私は「甘いんじゃないの？」と評価されようが、子どもの心を理解しようとする優しい教師でありたい。

（筑波大学附属大塚養護学校）

注　参考文献

小林重雄他編著『自閉症障害の理解と援助』コレール社、二〇〇三

長畑正道編著『行動障害の理解と援助』コレール社、二〇〇〇